

【三谷恵子先生追悼文】

三谷恵子さんを悼んで

服部文昭

三谷恵子さんの余りに早過ぎるご逝去からひと月になろうとしている。どうかすると、メールで連絡が来たり、スマホに電話が掛かって来るような気もして、まだ信じられないというのが正直なところである。きちんとした追悼文やお仕事のことなどは、長與進さんや石川達夫さん達がお書きになるだろうから、私は、断片的な大昔の思い出のようなことを書かせていただき、せめてものご冥福をお祈りする気持ちといたしたい。

三谷さんと初めてお目に掛ったのは、今から足掛け 45 年前。進学振り分けが済んだ初冬の頃、本郷の露文と駒場のロシア科に進学が内定した諸君を合同で歓迎するコンパが、渋谷の「ひな春」という、いつものお店で催された。在籍の学生・院生に加えて、当時は北垣信行、米川哲夫両先生を長老格として全ての先生と千野栄一先生のような非常勤講師の先生までも参加された大きな行事であった。本郷の露文への進学を決めた三谷さんは、青みがかった淡いグレイの暖かそうなコートを着て、物静かで知性的な印象を与える女子学生さんだった。

翌春から露文で栗原成郎先生の許、本格的なスラヴ研究をスタートさせたが、研究を続けて成果を实らせるには、環境、才能、努力の三拍子が揃わねばならない。三谷さんには、その全てが備わっていた。まったく恥ずかしながら、私など、目の前で吉上昭三先生とヘンリク・リップシツさんが『ポーランド語の入門』を使ってポーランド語を教えて下さっても、同じクラスの沼野充義君はどんどんと先に行ってしまうのに、結局、物にならなかった。私の習った頃はセルビア・クロアチア語と呼んだが、栗原先生からマンツーマンのような精読の授業もあったのだが、結局、こちらもだめだった。三谷さんは、「金剛石も磨かずば」どころか、金剛石を磨いて磨いて磨き切ったような存在だった。

もともと、決して周りに人を寄せ付けないようなことはなく、いつも周囲から愛され親しまれていた。川端、栗原両先生のお心遣いで企画された研究室親睦のための高尾山ハイキングなどにも積極的に参加されたり（この時は、駒場の助手の高橋清治さんが、まだ保育園児くらいのお子さんも連れて参加されたり、なかなか盛況だった）、研究室生活をいろいろな面で楽しまれていた。またこの頃は、世良公則のファンだな

どとも伺った記憶がある。後に岩波書店の露和辞典改定のお手伝いに加えて貰ったことがあった。和久利誓一先生を筆頭に飯田規和、新田実の先生方で、藤沼貴先生までも加わっていたが、そこに金田一真澄さんや岩井憲幸さん、三谷さん、私なども参加していた。或る真夏の日、三谷さんは29歳の誕生日を迎えた。編集部にいた岩波の社員の人たちも我々も十名あまりで、三谷さんのために大きなバースデーケーキを買ってきて、和やかにお祝いしたのだった。そして、その秋、三谷さんはザグレブ大学留学へと雄飛された。

根気よく研究に取り組みられるところも三谷さんの強みであったと思う。お若い頃、『賢者アキールの物語』にとっても興味を惹かれるというお話を聞いていた。だいぶ後年、京大で同僚だった頃、教授会の前だったか、「今はまだ忙殺されているけれど、いずれ時間を作って、『アキール』に打ち込みたい」とおっしゃった。私が、「ドゥルノヴォなども手掛かりに、是非、そうして下さい」と言ったら、嬉しそうにしていた記憶がある。そうしたら、2014年、三谷さんはスラ研の競争的資金を得て、本格的な研究に取り組み出したのだった。

同僚だった当時は、いつでもお話を伺えると思って、却って、京都と東京に離れて勤めている時よりコンタクトが薄かったこともあって、今にして思えば、あれも聞いておけば、これも聞いておけばと、悔やまれる。研究とは関係ないが、京大時代のいつだったか、三谷さんが自動抹茶機（実物を見なかったのだが、茶筌を機械仕掛けで回転させて「お抹茶」を準備する機械だと想像していた）で「今度、一服、ふるまいましょう」とおっしゃった。ところが、二人とも何かと忙しく、お茶を戴けずじまいになってしまったことが、やはり、悔やまれるのである。

最後に、これは私の推測に過ぎないのだが、三谷さんは、きっとクリスマスが好きだったのだと思う。これまで、いろいろと連絡を頂戴したが、大切な連絡と言うか、ワクワクするような連絡（例えば、スラ研の企画と一緒に応募しようとかの）は、決まって待降節の頃にあったのだ。

三谷さん、どうか、安らかに。